

琉球大学学術リポジトリ

[原著]過去7年間における琉球大学保健学部附属病院 耳鼻咽喉科悪性腫瘍統計

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学保健学部 公開日: 2014-07-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 津義山, 務, 宇良, 政治, 仲程, 一博, 仲井間, 憲英, 古謝, 将宏, 野田, 寛, Tsukayama, Tsutomu, Ura, Masaharu, Nakahodo, Kazuhiro, Nakaima, Norihide, Koja, Masahiro, Noda, Yutaka メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002016268

過去7年間に於ける琉球大学保健学部 附属病院耳鼻咽喉科悪性腫瘍統計

琉球大学保健学部附属病院耳鼻咽喉科
津嘉山 務 宇良政治 仲程一博
仲井間憲英 古謝将宏 野田 寛

はじめに

琉球大学保健学部附属病院耳鼻咽喉科においては、過去二回に亘って日本耳鼻咽喉科学会沖縄県地方部会学術講演会にて、頭頸部悪性腫瘍統計を報告してきたが、¹⁾²⁾今回昭和48年4月より、昭和54年12月末日迄の約7年間に於ける症例について統計的観察を行い、その中でとくに症例数の多い喉頭癌ならびに上顎癌については、3年粗生存率および5年生存率を算出し得たので報告する。

観察対象ならびに方法

観察対象は、昭和48年4月より昭和54年12月迄に琉球大学保健学部附属病院耳鼻咽喉科を訪れた頭頸部悪性腫瘍患者366例で、それらを年度別、発生部位別、年齢別、性別に統計をとり、そのうち発生部位を口腔(口唇、頬粘膜、歯肉、硬口蓋、口腔底、舌)、咽頭(上咽頭、中咽頭、下咽頭)、喉頭、鼻・副鼻腔(上顎、鼻腔、上顎を除く副鼻腔)、聴器、その他の6項目に区分し、その病理組織像および治療法を加えて検討した。

観察結果ならびに考按

I 年度別、年齢別、性別の観察結果

7年間全般を通して、頭頸部悪性腫瘍患者は各年度とも耳鼻咽喉科患者総数の約3% (昭和48年度21例、49年度49例、50年度56例、51年度50例、52年度52例、53年度59例、54年度84例)を占めていた。なお、昭和53年度は病院内年度区分の変更により4月より12月末日迄の9ヶ月間となっている。

観察対象となった366例の発生部位による分析では、口腔59例(16%)、咽頭118例(32%)、

喉頭96例(26%)、鼻・副鼻腔61例(16.5%)、聴器3例(0.8%)、その他32例(8.7%)となった(表1)。

初診時における年齢別分布は、60才台がもっとも多く126例、ついで50才台、70才台の順であり、患者総数366例中、男性282例、女性84例、男女比は3.3:1であった(図1)。

II 発生部位別の観察結果とその分析

A 口腔の悪性腫瘍について

頭頸部悪性腫瘍中、口腔癌の占める割合は59例(16%)であり、諸報告でも20%内外となっている。

部位別発生頻度は、舌癌が26例(44%)を示し、また、性別については、男性が女性の約2倍となっており、諸報告とほぼ同様の結果を得た。

病理組織像は、扁平上皮癌がほとんどであった。

B 咽頭の悪性腫瘍について(表3)

1) 上咽頭腫瘍

当科において26例経験し、これは頭頸部悪性腫瘍の7%に相当し、年齢では他の部位に比較して若年傾向を認めた。

疫学上、上咽頭癌は中国人に多発する傾向が認められている。歴史的、地理的に中国の南方地方および台湾に於ける深い沖縄県においては高率の発生が予想されるが、本邦における諸報告と大差はなく、若干高率の発生をうかがわせるにとどまった。

性別については、男性18例、女性8例、男女比2.2:1で、諸報告でも男性に多い傾向が認められている。

病理組織像は1968年より1974年の全国統計においては⁸⁾793例中、77%が扁平上皮癌、15%が悪性リンパ腫、その他8%となっているが、当科においては、26例中、癌腫22例、肉腫2例、悪性リ

リンパ腫2例であった。

治療については、放射線療法および化学療法が主体であったが、一例は頸部廓清術を行っている。

なお、初診後5年を経過した昭和48年度と49年度の患者9例中、現在全員死亡となっている(表3)。

表1. 耳鼻咽喉科過去7年間の悪性腫瘍患者年度別統計

	48年度	49年度	50年度	51年度	52年度	53年度	54年度	計
口 腔	2	10	11	5	12	7	12	59
口 唇		1			1			2
頬 粘 膜	1	2	3	1	2		2	11
歯 肉					1			1
硬 口 蓋		1	1		1	1	2	6
口 腔 底	1	3	1	2	2	2	2	13
舌		3	6	2	5	4	5	26
咽 頭	6	19	19	15	16	15	28	118
上 咽 頭	4	5	4	4	1	1	7	26
中 咽 頭	2	5	7	7	9	9	14	53
下 咽 頭		9	8	4	6	5	7	39
喉 頭	6	8	12	13	13	19	25	96
鼻・副鼻腔	6	10	8	12	7	7	11	61
上 顎 腔	4	6	5	9	4	5	8	41
鼻 腔	1	3	3	2	3	2	3	17
副 鼻 腔	1	1		1				3
聴 器	1				1		1	3
中 耳	1				1			2
外 耳							1	1
そ の 他		2	6	5	3	8	5	29
食 道		1	2	2		1		6
甲 状 腺			2	1		1		4
上 眼 瞼				1				1
顎 下 部				1				1
下 顎 部			1					1
Hodgkin 病			1		1	1		3
Wegener 肉芽腫症		1			2	1	1	5
耳 下 腺						2	2	4
顎 下 腺							1	1
顎部悪性リンパ腫						2	1	3
総 計	21	49	56	50	52	56	82	366

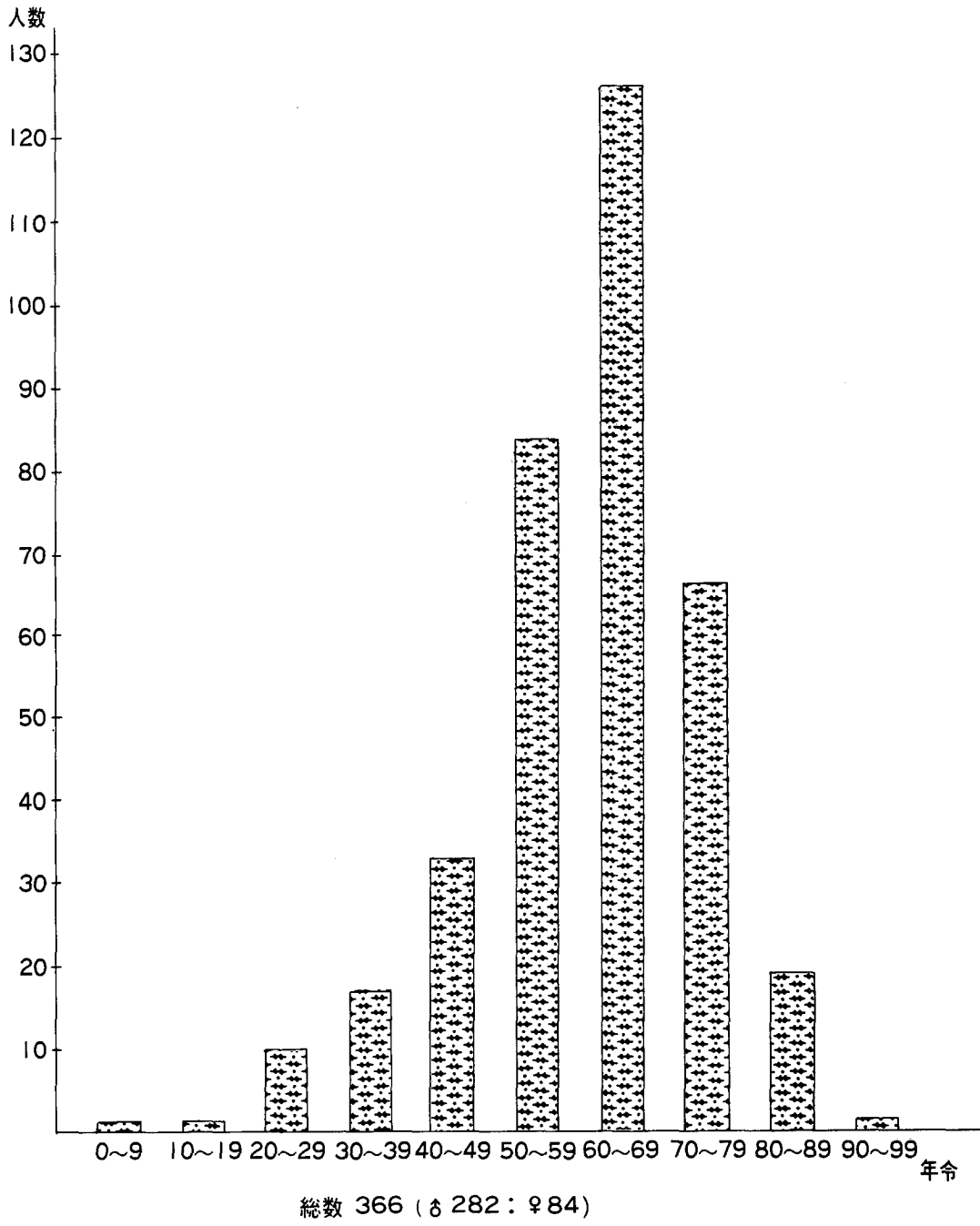


図1. 初診時における年齢別分布

表2. 口腔の悪性腫瘍

口唇 (♂1:♀1)	扁平上皮癌 2	手 + 放 放 + 化	1 1
頬粘膜 (♂6:♀5)	扁平上皮癌 10	化 放 + 化 放 + 化 + 免 手 + 放 + 化 未治療	1 6 2 1 1
歯肉 (♂1:♀0)	扁平上皮癌 1	放 + 化 + 免	1
硬口蓋 (♂5:♀1)	扁平上皮癌 6	手 + 化 放 + 化 + 免 化 未治療	1 3 1 1
口腔底 (♂11:♀2)	扁平上皮癌 13	放 + 化 + 免 放 + 化 化 免 手 + 化 + 放 + 免 動注 未治療	4 2 3 1 1 1 1
舌 (♂16:♀10)	扁平上皮癌 23	放 + 化 放 + 化 + 免 放 手 + 放 + 化 化 + 免 動注 未治療	8 9 2 1 4 1 2
	不詳 3		

放=放射線療法, 化=化学療法, 免=免疫療法, 手=手術療法

2) 中咽頭腫瘍

53例経験し、頭頸部悪性腫瘍の14.4%に相当し、年齢は60才台がもっとも多く、性別は男性41例、女性12例で男女比は3.4:1で、諸報告⁴⁾⁵⁾でも当科でも同様に男性に高い比率を得た。

病理組織像は癌腫37例(扁平上皮癌)、肉腫8例、悪性リンパ腫5例、不詳3例となっている。

治療は放射線療法を主体とした化学療法が多く、この中には動注施行例も6例含まれている。

表3. 咽頭の悪性腫瘍

上咽頭 26 (♂18:♀8)	<ul style="list-style-type: none"> 扁平上皮癌 16 腺癌 1 細網肉腫 2 悪性リンパ腫 2 未分化癌 3 リンパ上皮腫 2 	<ul style="list-style-type: none"> 放 + 化 + 免 11 放 + 化 5 放 2 化 3 化 + 免 1 手 + 放 1 未治療 3
中咽頭 53 (♂41:♀12)	<ul style="list-style-type: none"> 扁平上皮癌 37 細網肉腫 8 悪性リンパ腫 5 不詳 3 	<ul style="list-style-type: none"> 放 + 化 17 放 + 化 + 免 19 化 3 化 + 免 3 手 + 放 + 化 1 放 2 動注 6 未治療 8
下咽頭 39 (♂35:♀4)	<ul style="list-style-type: none"> 扁平上皮癌 34 異型乳頭腫 1 不詳 4 	<ul style="list-style-type: none"> 放 + 化 + 免 19 放 + 化 5 化 3 手 + 放 2 手 + 化 2 手 1 放 1 未治療 6

3) 下咽頭腫瘍

当腫瘍は頭頸部悪性腫瘍中、診断、治療および予後全体にわたり、もっとも困難にして予後の悪い腫瘍とされているが、⁵⁾⁷⁾当科においては、39例を経験し、これは頭頸部悪性腫瘍の10.6%に相当し、⁴⁾年齢は60才台にもっとも多く、性別は、全国統計では男女比は1.6:1であるが、当科では8.8:1であった。

病理組織像は、ごく稀な例をのぞけば、すべて扁平上皮癌で、分化型を示している。

また、末期癌で、初診時ただちに気管切開を施行し、他の治療に移る間もなく癌死したのが4例あった。

なお、昭和48年度と49年度患者9例中、現在生存が確認されているのは1例のみである。

C 喉頭の悪性腫瘍について(表4)

症例の約2-4%を占めているといわれている。⁴⁾¹⁰⁾

喉頭癌は頭頸部悪性腫瘍中もっとも多く、全癌

表4. 喉頭の悪性腫瘍

喉 頭 96 (♂92:♀4)	{ 扁平上皮癌 74 類 上 皮 癌 1 リンパ肉腫 1 不 詳 20	{ 手 12 手 + 放 + 化 6 手 + 放 4 手 + 放 + 化 + 免 3 手 + 放 + 免 3 手 + 化 + 免 11 手 + 化 4 手 + 免 2 放 2 放 + 化 7 放 + 免 1 放 + 化 + 免 14 化 2 化 + 免 3 未 治 療 22
--------------------	--	---

当科においては、96例を経験し、頭頸部悪性腫瘍の26%に相当しており、最近とみに増加の傾向が顕著である。

年齢は60才台がもっとも多く、50才台、70才台と続き、性別については、諸報告では、男女比が10:1となっているが、当科においては、男性92例、女性わずかに4例のみで、圧倒的に男性に多く認められた。

病理組織像は、ほとんどが扁平上皮癌であった。なお、病理組織像で不詳とは、初診時すでに、他の診療施設において診断治療を受けていた場合や、治療を途中で止めた場合などを指し、治療法において、未治療とは、患者の家族の了解が得られず治療を拒否されたもの、他の診療施設への転院や他科への転科、緊急気管切開術のみで、腫瘍そのものに対する治療に移れなかったものなどを指している。

当科における喉頭癌は、大多数が進行癌であったため、腫瘍の発生部位は、声門上、声門、声門下のいずれであるか不明確な例が多く、手術全症例とも、全喉頭摘出術を施行している。早期癌症例においては、放射線療法、化学療法、および免疫療法などにて一次的治療を得ているため、部分切除施行例は皆無であった。現在までの喉頭全摘術の最高年齢は82才であったが癌死している。

なお、3年粗生存率は65%、昭和48年度と49年度14症例の5年生存率は45%を算出し得た。

D 鼻・副鼻腔の悪性腫瘍(とくに上顎癌)について(表5)

上顎の悪性腫瘍統計としては、種々の報告があるが、年齢では50才台がもっとも多く、性別では男性でやや多く、患側では左右差がなく、両側はまれとのことであった。⁴⁾¹¹⁾¹²⁾

表 5. 上顎・鼻腔・副鼻腔の悪性腫瘍

上顎 (♂27:♀14)	41	扁平上皮癌 細網肉腫 腺癌 乳様腺腫 基底細胞癌 不詳	26	手 手+放+化 手+放 手+放+化+免 手+放+免 手+化+免 放+化 放+化+免 放 化 動注 未治療	4
			2		3
			1		2
			1		3
			1		1
			10		2
					6
					12
					1
					1
鼻腔 (♂8:♀9)	17	扁平上皮癌 細網肉腫 未分化癌 腺癌 基底細胞癌 線維肉腫 リンパ上皮腫	9	放 放+化 放+化+免 化+免 手+化+免 未治療	3
			2		4
			1		4
			2		1
			1		1
			1		4
			1		
副鼻腔 (上顎を除く) (♂2:♀1)	3	腺癌 横紋筋肉腫 悪性リンパ腫	1	放 放+免 未治療	1
			1		1
			1		1

当科においては41例を経験し、男性27例、女性14例、男女比は1.9 : 1で、患側は右側23例、左側18例で両側癌はなかった。

病理組織像および治療法は表6のごとくであるが、当科における手術施行は上顎全摘術9例、これと同時に眼窩内容摘出術を施行した3例、計12例であり、昭和52年以降3年間の症例に対しては、上顎全摘術適応症例がなく、動注法を主体とした化学療法、放射線療法、および局所の清掃(ネクロトミー)の三者併用療法にて治療している。

なお、昭和48年度と49年度に加療した10症例の5年生存率は60%となっており、このうち7例は上顎全摘および亜全摘が施行されている。3年粗

生存率については、22%を算出した。

E 聴器の悪性腫瘍について

聴器悪性腫瘍は稀であり、とくに中耳癌はきわめて少なく、慢性中耳炎を発癌母地とする扁平上皮癌であるとされているが、当科においては中耳悪性腫瘍2例(扁平上皮癌)、外耳道悪性腫瘍1例を経験した。

F その他

以上の5項目を除き、その他として食道癌6例、甲状腺癌4例、Hodgkin病3例、頸部悪性リンパ腫3例、および耳下腺、顎下腺の悪性腫瘍を5例、計29例を経験した。

また、これら悪性腫瘍中、重複癌と判定された

症例が3例あった。¹³⁾

ま と め

昭和48年4月より昭和54年12月末日迄の約7年間に琉球大学保健学部附属病院耳鼻咽喉科において取り扱った悪性腫瘍患者366例の統計的観察を行なった。

悪性腫瘍患者は各年度ともに外来患者総数の約3%を占めており、これらを発生部位別に口腔腫瘍59例(16%)、咽頭腫瘍118例(32%)、喉頭腫瘍96例(26%)、鼻・副鼻腔腫瘍61例(16.5%)、聴器腫瘍3例(0.8%)、その他32例(8.7%)の6項目に分けて検討した。

性別では男性182例、女性86例、男女比3.3:1で男女ともに50才台、60才台の癌年令層に高頻度にみられた。

症例数の比較的多い喉頭癌ならびに上顎癌について、3年粗生存率および5年生存率は、喉頭癌は65%と45%、上顎癌は22%および59%を算出し得た。

本論文の要旨は、第12回日本耳鼻咽喉科学会沖縄県地方部会学術講演会において発表した。

参 考 文 献

- 1) 都川紀正, 栗田健一, 新垣義孝, 又吉重光, 野田 寛: 琉球大学保健学部附属病院耳鼻咽喉科過去4年間の悪性腫瘍の実態, 琉大保医誌1, 158-166 1978.
- 2) 古謝将宏, 栗田健一, 新垣義孝, 又吉重光, 源河朝博, 野田 寛: 過去5年間の琉大保健学部附属病院耳鼻咽喉科悪性腫瘍統計, 琉大保医誌1, 347-352, 1978.
- 3) 竹田千里, 松浦 鎮: 口腔腫瘍, 北村 武編, 頭頸部腫瘍, P. 212-236, 医学書院, 東京, 1971.
- 4) 岩本彦之蒸: 頭頸部腫瘍の現況, 北村 武編, 頭頸部腫瘍, P. 3-14, 医学書院, 東京, 1971.
- 5) 佐藤武男, 官原 裕: 咽喉癌—その基礎と臨床, P. 19-23, P. 24-27, P. 62-65, P. 82-91, 金原出版 1977.
- 6) 竹田千里, 松浦 鎮, 小野 勇, 梅垣洋一郎, 中野政雄, 柄川 順: 国立ガンセンターにおける鼻咽腔悪性腫瘍の放射線治療, 耳鼻咽喉科38, 119-130, 1966.
- 7) 馬場駿吉, 大橋 道三: 当科過去8年間における上咽頭悪性腫瘍症例の検討, 耳鼻咽喉科臨床63, 71-84, 1970.
- 8) 服部 淳: 上咽頭悪性腫瘍全国統計, 耳鼻咽喉科59, 581-585, 1966.
- 9) 佐藤武男: 頭頸部腫瘍の最近の動向, 耳鼻咽喉科47, 699-705, 1975.
- 10) 岩本彦之蒸: 喉頭腫瘍, 北村 武編, 頭頸部腫瘍 P. 295-337, 医学書院, 東京, 1971.
- 11) 酒井 俊: 上顎癌, P. 3-14, 金原出版, 1974.
- 12) 片桐圭一: 鼻・副鼻腔悪性腫瘍, 北村 武編, 頭頸部腫瘍, P. 165-207, 医学書院, 東京, 1971.
- 13) 又吉重光, 栗田健一, 都川紀正, 新垣義孝, 野田 寛: 我々の経験した重複悪性腫瘍症例, 琉大保医誌1, 329-333, 1978.

Abstract

**Statistical Observations on the 366 Malignant Tumors in
the Oto-Rhino-Laryngological Department of the Ryukyus
University Hospital During Past Seven Years**

Tsutomu TSUKAYAMA, Masaharu URA, Kazuhiro NAKAHODO,
Norihide NAKAIMA, Masahiro KOJA and Yutaka NODA
Department of Otorhinolaryngology, College of Health Sciences, University of the Ryukyus.

The 366 patients with malignant tumors in head and neck were statistically observed during past seven years from April 1973 to December 1979.

The proportion of the patients with malignant tumors in each year were always almost 3% of all patients in our ORL-Department.

These patients were divided into the 6 locations, i. e. 59 cases in oral cavity (16.0%), 118 in pharynx (32.0%), 96 in larynx (26.0%), 61 in nasal and paranasal cavities (16.5%), 3 in ear (0.8%) and 32 in the others (8.7%), and were discussed with the bibliographical considerations.

The male and female patients with malignant tumor were respectively 282 and 86, and the ratio of the male to the female was 3.3 : 1.

The malignant tumors in head and neck were also found in the so-called cancer age of 50 and 60 years of both the male and female patients.

The rough survival rate for three years and the survival rate for five years were respectively 65% and 45% in the laryngeal cancers, and 22% and 59% in the cancers of maxillary sinus.